

1. 学 科

1.1 資源生物科学科

1. 学科の概要

資源生物科学科では、環境との調和と生態系へのマイナスインパクトの低減を図りながら、資源生物のより安定した高い生産性とよりよい品質の確保を目指す課題に取り組む人材を育てるために、基礎知識から応用技術までの幅広い教育を提供している。この目的のため、資源生物と関わりの深い31分野（農学研究科3専攻29分野、生命科学研究科1分野、情報科学研究科1分野）の研究室の教官が本学科の教育に携わっている。そしてこれらの各分野を資源植物、資源動物、海洋生物、生産環境の4つのグループに分けて体系的に教育を行っている。

2. 学生の人数

本学科の学生定員は94名で、本年度の入学生は96名であった。

3. 科目を提供する専攻名と分野名

資源植物グループ：農学専攻（作物学、育種学、蔬菜花卉園芸学、果樹園芸学、栽培システム学、植物生産管理学、品質評価学、品質設計開発学）、応用生物科学専攻（植物遺伝学、栽培植物起原学）、生命科学研究科（植物生理学*¹）〔11分野〕

資源動物グループ：応用生物科学専攻（動物遺伝育種学、生殖生物学、動物栄養科学、生体機構学、畜産資源学、生物資源情報学*²）〔6分野〕

海洋生物グループ：応用生物科学専攻（海洋生物環境学、海洋生物増殖学、海洋分子微生物学、海洋環境微生物学、海洋生物生産利用学、海洋生物機能学）〔6分野〕

生産環境グループ：農学専攻（雑草学）、応用生物科学専攻（植物病理学、昆虫生態学、昆虫生理学）、地域環境科学専攻（熱帯農業生態学、土壌学、微生物環境制御学、生態情報開発学）〔8分野〕

*¹植物生理学分野は生命科学研究科所属、*²生物資源情報学分野は情報科学研究科所属

4. 平成17度（2005年度）の経過

ガイダンス：新入生に対して4月7日、2回生、3回生には4月6日にそれぞれガイダンスを実施し、学科・各グループの紹介、4回生進級時の分野分属の説明および専門科目の履修指導を行った。

専門配当科目：1回生配当の専門基礎科目として農学概論Ⅰ、Ⅱ（学部共通）、資源生物科学基礎Ⅰ、Ⅱ、2回生配当の専門基礎科目として、資源生物科学概論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、分子生物学、遺伝学、生態学、動物生理学、微生物学、植物生理学、応用気象学、生物統計学、資源生物科学基礎実験を提供した。また、2回生配当の専門科目として、土壌学Ⅰ、海洋動物学、栽培技術論と実習、畜産技術論と実習、海洋生物科学技術論と実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、植物調査法と実習を提供した。

1.2 応用生命科学科

1. 学科の概要

応用生命科学科は平成13年4月に発足し、細胞生化学、生体高分子化学、生物調節化学、化学生態学、植物栄養学、エネルギー変換細胞学、発酵生理及び醸造学、制御発酵学、生体機能化学、生物機能制御化学、応用構造生物学、分子細胞育種学（全能性統御機構学）。植物分子生物学（遺伝子特性学）の11分野から構成される。微生物、植物、動物等を対象とした化学、物理化学、生化学、分子生物学等のバイオサイエンスの基礎領域から応用微生物学、食品工学、応用生物工学などを含む応用領域まで多岐にわたる研究教育を展開している。

2. 学生の人数

平成17年度応用生命科学科	学生数	51名（1回生）
		50名（2回生）
		55名（3回生）
		55名（4回生）

3. 科目を提供する専攻名と分野

応用生命科学専攻：細胞生化学、生体高分子化学、生物調節化学、化学生態学、植物栄養学、エネルギー変換細胞学、発酵生理及び醸造学、制御発酵学、生体機能化学、生物機能制御化学、応用構造生物学

統合生命科学専攻：分子細胞育種学、植物分子生物学

4. 平成17年度（2005年度）の経過

ガイダンス：新入生に対し、平成17年4月7日午後15時00分からW218講義室で実施、各分野別に研究室の簡単な紹介がスライド、オーバーヘッドプロジェクター及び液晶プロジェクターを使って行われた。

5. 専門科目：応用生命科学入門Ⅰ～Ⅳ、細胞生物学概論、生化学Ⅰ、Ⅱ、有機構造解析学、生物物理化学Ⅰ、Ⅱ、分析化学、有機反応機構論Ⅰ、Ⅱ、生物有機化学Ⅰ～Ⅲ、一般生体高分子化学、生体高分子構造論、生体触媒化学、応用微生物学Ⅰ～Ⅳ、植物栄養学、植物生化学、分子生物学Ⅰ、Ⅱ、分子細胞生物学Ⅰ、Ⅱ、栄養化学、食品工学、醸造食品学概論、油脂製造加工並びに食品保蔵論、基礎生理学。

1.3 地域環境工学科

1. 学科・コースの概要

この学科は、地球規模で生じる環境問題と食料・エネルギー問題を解決するために必要とされる工学を教育・研究する。農村における生産・生活基盤の整備を対象として、歴史的に体系づけられた農業土木学は、土や水等の地域資源やそれらを有効に活用するための諸施設にかかる種々の技術、さらに農業・農村の調和のある振興を通じて地域環境の保全を図るノウハウを蓄積してきた。さらにまた、環境保全に配慮した高度の農業と農産加工を対象として体系づけられてきた農業機械学は、フィールドロボティクス、テラメカ、電気エネルギー伝送、バイオマスエネルギーの利活用、農産加工、農産物貯蔵、流通に関する多くの知識を蓄積している。地域環境工学は従来の農業土木学と農業機械学各分野の一層の発展に加えて、地域環境の総合マネジメントという新しい工学を目指すものである。

2. 学生の人数

- 1 回生 41名
- 2 回生 34名
- 3 回生 32名
- 4 回生 34名

(平成17年4月現在)

3. 学科に科目を提供する専攻名と分野名

地域環境科学専攻：施設機能工学、水資源利用工学、水環境工学、農村計画学、農業システム工学、フィールドロボティクス、農産加工学

4. 平成17年度（2005年）の経過

ガイダンス等：1回生には4月7日全学共通科目ガイダンスに引き続き、担当7分野の教員の下で学科ガイダンスを行った。2回生には4月6日午前に、3回生には同日午後に、担当7分野の教員出席の下で学科ガイダンスを行った。

専門配当科目：この学科の所属学生1～2回生を対象とした専門科目として、学部共通科目；農学概論Ⅰ、Ⅱ、学科専門基礎科目の地域環境工学概論Ⅰ、Ⅱ、地域環境工学演習、情報処理学及び演習Ⅰ、Ⅱ、地域環境工学基礎、応用数学、応用力学、材料力学、水理学を提供した。

3回生にはシラバスに沿って以下のような専門科目を提供した。工業数学C、環境動態学、測量学、土木材料学、構造解析学、土壌物理学、農業水文学、地域整備開発施設学、灌漑排水学、農村計画学、農地整備学、水資源利用学、利水システム工学、国土・地域計画、生物機械計測学、振動学、熱力学及び伝熱工学、数理計画法、農用エネルギー・動力学、フィールドロボティクス、農産加工機械学、制御工学、機械設計、農業機械技術史、農業機械学専門外国書講義、作物学Ⅰ、蔬菜園芸学、果樹園芸学Ⅰ、土壌学Ⅰ、農学原

論、食料・環境政策学、資源環境経済学、食品工学、砂防学Ⅰ、森林水文学、森林生態学、地域環境工学演習、情報処理学及び演習Ⅰ、情報処理学及び演習Ⅱ、栽培技術論と実習、土木材料・環境地盤工学実験、水理学実験、土壌物理学・水環境工学実験、測量法及び実習、施設機能工学演習、計算水理学演習、農業機械学実験Ⅰ、農業機械学実験Ⅱ、製図（CAD）演習の専門科目を提供した。

4回生にはシラバスに沿って、生物圏情報学Ⅰ、生物圏情報学Ⅱ、地域環境工学実習、灌漑排水学演習、農業機械学演習の専門科目を提供した。また、地域環境工学実習は夏期休業中にインターンシップの形で、民間企業や農水省、道府県、各種公団などの協力を得て実施した。また、インターンシップの実施に当たっては大学本部からの経費補助を受けた。課題研究は分属している各分野での指導の下に行ったが、4回生全員が卒業論文を提出した。4回生は平成17年度で2回目であり、専門科目、インターンシップ、課題研究と順調に経過した。

本年度で2回目となる学生による講義評価が学部科目に対して実施された。昨年と合わせて、本学科で開講されている約3分の2の科目で学生による評価を実施したことになる。この結果は、学生の意見を反映したものであり、多くの教員がこの評価を講義・演習の改善に活用した。

1.4 食料・環境経済学科

1. 学科の概要

いま、人類が直面している難問のなかで、私達の生活に最も関連の深い問題は、食料問題と環境問題と言える。これらの問題は、先進国、途上国を問わず、また政治経済体制の如何にも関係なく、近年ますます深刻化している。こうした状況は、世界中の国が急速な発展のために効率性のみに重点をおいた経済政策を長年にわたって取り続けた結果、生じてきた問題である。資源は無尽蔵ではなく有限であることを再認識し始めた現在、私達は短期的な効率性追求より長期的な持続的発展の可能性を模索することが重要であることを悟り始めた。

農業生産は、無機的な工業生産とは異なり、各地域の自然生態系と社会のあり方を反映しながら、地域的な個性を生かして環境保全と調和した持続的展開を目指さねばならない。食料問題も環境問題も人間の作り出した社会・経済システムの産物である。本学科は、その解決を課題とすると同時に、他の学科で行われる自然科学的諸研究の成果を積極的に吸収し、それらが現実社会に受容されるための諸条件を探ることや、これらを農学論として総括し、新しい農学のパラダイム（理論体系）を発信していくことも目標にしている。

農学部他学科のほとんどが自然科学的な研究手法をとるなかで、本学科のみが人文・社会学的な研究手法を用いる。人類の営み、即ち人類と自然との係わり合いを研究するにあたって、人文・社会学的な考察は極めて重要な分野であるといえよう。当学科では、農林水畜産業の担い手とその場である農山漁村の文化的・社会的・経済的環境の特質や発展方策を解明する。また地域規模・地球規模での環境保全との調和と、より豊かで安定した社会・経済のあり方を追求するために、他産業や都市との関係にも目を配るとともに、広く世界的視野において農業・農村・環境とその考察方法を学ぶ。

本学科は、以下のような8つの教育・研究分野から構成され、これらは3つのグループに大別される。

- ミクロ分析： 農業組織経営学分野、農業経営情報会計学分野
- マクロ分析： 地域環境経済学分野、食料・環境政策学分野、
森林・林業政策学分野、国際農村発展論分野
- 歴史・哲学的分析： 比較農史学分野、農学原論分野

2. 学生の人数

食料・環境経済学科の学生定員は32名で、平成17年度の在籍学生数は、1回生が35名、2回生が33名、3回生が29名、4回生が35名である。

3. 科目を提供する専攻名と分野名

専攻名：生物資源経済学専攻

各分野名：農業組織経営学分野、農業経営情報会計学分野、地域環境経済学分野、
食料・環境政策学分野、森林・林業政策学分野、国際農村発展論分野、
比較農史学分野、農学原論分野

4. 平成17年（2005年）の経過

ガイダンス：

4月7日、新入生のためのガイダンス

4月6日、新2回生および新3回生向けのガイダンス

4月7日、新入生のための歓迎懇親会開催

5. 平成17年度に開講された専門配当科目

1回生向けの講義として、農学概論Ⅰ、農学概論Ⅱ、食料・環境経済学概論、農学基礎社会・経済論、国際農林業概論、2回生向けの講義として、経済原論Ⅰ、経済原論Ⅱ、経済思想史、社会経済史、農業発展論、アグリビジネス論、農林統計利用実習を、それぞれ提供した。

1.5 森林科学科

1. 学科の概要

20世紀は人類の活動が地球の許容範囲を超えて広がり、大きな負担を将来に残した。21世紀の最大課題は、その反省にたつて、いかに持続可能な社会を構築するかということである。それには、森林が再生可能な資源である点や、地域災害防止や地球環境保全の役割を持つ点を最大限に活かすことが不可欠である。そこで、森林生態系の特性や森林の物質循環に果たす機能、樹木をはじめとする持続生産可能な森林資源の利用に関して、総合的な科学を教育する。そのため、下記の講義のほか、各種実験やフィールド科学教育研究センターの研究林などを活用した野外実習を通じ、人間と森林との永続的共生の科学とその基礎を学ぶ。

(1) 森林や森林資源について自然科学的な基礎と応用を教授する講義：

森林利用学、樹木生理学、森林育成学、森林植物学、森林管理システム及び応用技術論、雪氷学基礎論、森林生態学、群集生態学、森林植物繁殖学、野生動物保全学、熱帯林環境学、熱帯森林資源学、砂防学、森林水文学、森林影響論、森林生化学、生物圏情報学

(2) 森林から生み出される生物資源の利用に関する講義：

樹木細胞生理学、細胞壁形成論、生物材料物性学、木構造学、木材加工学、セルロース化学、バイオマス化学、高分子合成化学、バイオマス複合材料化学、生物物理化学、パルプ・紙学、森林有機化学、高分子物性学、バイオマスエネルギー、木材保存学、木質材料学、住環境学、きのこ学

(3) 森林－人間共生の文化的側面に関する講義：

国際森林資源論、森林計画学、森林ツーリズム論、造園学、緑地植物学、緑地計画論

2. 学生の人数：1回生：60名、2回生：59名、3回生：55名、4回生：61名

3. 科目を提供する専攻名分野：

- ・森林科学専攻：森林・人間関係学、森林環境計画学、熱帯林環境学、森林利用学、森林生物学、環境デザイン学、山地保全学、生物材料設計学、林産加工学、生物繊維学、樹木細胞学、複合材料化学、生物材料化学
- ・地域環境科学専攻：森林生態学、森林水文学、森林生化学
- ・フィールド科学教育研究センター：森林生態保全学、森林資源管理学、森林環境情報学、里山資源保全学
- ・エネルギー科学研究科 エネルギー社会・環境科学専攻：エネルギーエコシステム学
- ・情報学研究科 社会情報学専攻：生物圏情報学

4. 平成17年度（2005年度）の経過

ガイダンスについては、1回生には、4月7日にカリキュラムと各研究室の簡単な説明を行った。2回生には、4月6日に実習を含むカリキュラムの説明を行った。3回生には、4月6日に、カリキュラムのほか、分野分属の方法について説明した。1回生を対象にフィールド科学教育研究センターの協力を得て、4月16日に上賀茂試験地見学と歓迎会を実施した。

1.6 食品生物科学科

1. 学科の概要

近年、食品の分野は、従来の農学分野のみならず、より広範な分野、たとえば遺伝子や酵素、発酵や腐敗、保存や加工、品質管理や流通、栄養、健康やスポーツ、生活習慣病や食品アレルギー等々の多彩なキーワードによって代表される事象や、社会学、環境科学、生理学および心理学等の周辺の学問分野と密接に関わりをもっている。このような新しい時代に対応するために、食品を中心とした新しい教育・研究システムが必要となってきた。

食品生物科学科は、このような社会的背景のもと、2001年4月に食品の開発や生産に関わる、高度の技術者・研究者を育成する目的で設立された。本学科は、酵素化学、食環境学、生命有機化学、栄養化学、食品分子機能学、食品生理機能学、農産製造学、生物機能変換学の8分野から構成され、食品を取り巻く広範な領域の学問・知識を基礎から応用にわたって幅広く緻密に教授している。

2. 学生の人数

平成17年度における学生数：35名（1回生）、33名（2回生）、35名（3回生）、40名（4回生）

3. 科目を提供する専攻名と分野

食品生物科学専攻：食品生命科学講座（酵素化学、食環境学、生命有機化学）、食品健康科学講座（栄養化学、食品分子機能学、食品生理機能学）、食品生産工学講座（農産製造学、生物機能変換学）

生命科学研究科：統合生命科学専攻（生体情報応答学、微生物細胞機構学、分子応答機構学）

4. 平成17年度（2005年度）の経過

ガイダンス：新入生に対し、平成17年4月7日午後、各分野別の研究室の簡単な紹介が行われた。

専門配当科目：食品基礎生物学Ⅰ～Ⅲ、食品有機化学Ⅰ～Ⅲ、食品物理化学Ⅰ、Ⅱ、食品生化学Ⅰ、Ⅱ、食品安全学Ⅰ、Ⅱ、食品分子生物学、食品微生物学、食品生理学、酵素化学、生命有機化学、栄養化学、食品工学、食品分子機能学、食品生理機能学、生物機能変換学、生体情報応答学、微生物生産学、食環境学、食品生物科学入門及び実習Ⅰ、Ⅱ

1.7 生物生産科学科（4回生）

1. 学科・コースの概要

生物生産科学科は、人類が必要とする食料や生活資材となる多様な生物の生命のしくみを明らかにして安定した生産を図り、同時にそれらを有効利用して行くための基礎理論や応用技術について教育を行う学科として発足した。その目的のために、生物生産とその利用に関わる分野を二つに分割して資源生物科学コースと生産システム学コースとし、それぞれを体系的に学習できるようにしている。

資源生物科学コース：一次生産に関わる植物、動物、微生物などの有用生物資源について、分子・細胞レベルから個体・集団のレベルにわたって、その特性や潜在能力を把握し、生物生産のための技術体系を構築することを学習する。

生産システム学コース：農林業の生産から利用に至る現実的な技術システムを対象としている。すなわち、農林業における生産過程や生産物加工・利用の過程で使用される機械や施設に関する基礎原理、機械の開発利用に結びつく農林産物の物性や生産環境情報、自動化などの応用技術、機械の有効利用、生産環境の保全、生産物の有効利用などを推進するための作業システムや加工システムについて学習する。

2. 学生の人数、各コースの人数

改組以前の本学科の学生定員は104名であった。

3. 各コースに科目を提供する専攻名と分野名

資源生物科学コース：農学専攻（作物学、育種学、蔬菜花卉園芸学、果樹園芸学、雑草学、栽培システム学）、応用生物科学専攻（植物遺伝学、植物生理学、栽培植物起原学、植物病理学、昆虫生態学、昆虫生理学、海洋生物環境学、海洋生物増殖学、海洋分子微生物学、海洋環境微生物学、海洋生物生産利用学、海洋生物機能学、動物遺伝育種学、生殖生物学、動物栄養科学、生体機構学、畜産資源学）、地域環境科学専攻（熱帯農業生態学）

生産システム学コース：森林科学専攻（森林利用学、林産加工学）、地域環境科学専攻（農業システム工学、フィールドロボティクス、農産加工学）

4. 平成17年度（2005年度）の経過

改組の前年に本学科に入学した学生の学年進行に伴う卒業年は平成15年度であったため、平成17年度はガイダンス等は行わなかった。

1.8 生物機能科学科（4回生）

1. 学科・コースの概要

生物機能科学科は応用生命科学コースと生物材料科学コースからなっている。応用生命科学コースは、細胞生化学、生体高分子化学、生物調節化学、化学生態学、植物栄養学、発酵生理及び醸造学、制御発酵学、生体機能化学、生物機能制御化学、栄養化学、生体情報応答学、生命有機化学、農産製造学、微生物生産学、酵素化学、植物分子生物学、分子細胞育種学の17分野から構成されている。

応用生命科学コースでは、微生物、動物、植物等を対象とした化学、物理化学、生化学、分子生物学、生理学等のバイオサイエンス領域の基礎研究から、応用微生物学、生物工学、化学工学等を含む応用研究まで多岐にわたる教育研究を展開している。

生物材料科学コースは、生物材料設計学、天然繊維工学、植物細胞構造学、複合材料化学、生物材料化学、バイオマス循環論の6分野から構成され、衣食住のうち住宅をはじめとして家具、楽器、衣料、紙、セルロース等人々の生活を豊かにする生物由来の材料を通して、生物組織、化学、物理等の自然科学の基礎と応用の教育研究を推進している。

1.9 生産環境科学科（4回生）

1. 学科・コースの概要

21世紀に入って近代科学は急速に発展し、食料をはじめとする人類の生存のための基礎的
物材の増産に世界的に大きく貢献するとともに、それは人口の飛躍的な増大をもたらした。
一方、これまで人類が考慮していなかった環境破壊と自然資源の限界に直面し、人類の生存
を制約することになってきた。

このような状況の下、人類の生存・存続と環境破壊と自然資源の限界のジレンマを解決す
るため適切な研究を行い教育するため、現在自然科学・工学・社会科学を統合する総合科学
としての農学が必須となっている。この目的枠組みの下に編成されたのが、生産環境科学科
である。この学科では、農林水産業の場となる自然環境特性を把握するとともに、第一次産
業の持続的発展と人類を含めた生物的自然の持続性を可能とする地球環境と自然資源の維持
を図るための方策、つまり人類と自然の共生のあり方を追求する総合科学の確立を目指す。
その追求の方法・手段として3つの方向性が当学科のコースとして策定される。

生物環境科学コース：生態学的視点に立って、森林・草原・農地などの陸上生態系の環境を
構成する要因とそこに生息する生命体との相互作用機構を学習する。

地球環境創造コース：自然と社会の仕組みの理解に立って、生産・生活・自然空間を工学的
手法によって、より高度に改良・保全するための科学技術を学習する。

生物資源経済学コース：農林水畜産業・農家・農村・諸制度、またそれらの基礎である文化
的・社会的・経済的環境の特質と関係を解明し、人間と自然資源・環境との調和を確立
するために、自然科学・工学との関連に留意しつつ人文・社会科学的考察方法を学習す
る。

2. 各コースの学生数

4回生（平成17年4月現在）

生物環境科学コース：0名

地域環境創造コース：2名

生物資源経済学コース：9名

なお、平成17度（平成18年3月）に卒業ないし退学、もしくは除籍された学生数を除いた在
学生は、地域環境創造学コース2名、生物資源経済学コース3名となり、旧生物環境科学コ
ースは前年度より消滅している。

3. 各コースに科目を提供する専攻名と分野名

生物環境科学コース：地域環境科学専攻（森林生態学、土壌学、森林水文学、微生物環境制
御学、生態情報開発学）、森林科学専攻（森林・人間関係学、熱帯林環境学、森林生物学、
森林情報学、森林育成学）

地域環境創造コース：森林科学専攻（環境デザイン学、山地保全学）、地域環境科学専攻（施
設機能工学、水資源利用工学、水環境工学、農村計画学）

生物資源経済学コース：生物資源経済学専攻（農業組織経営学、経営情報会計学、地域環境

経済学、食料・環境政策学、森林・林業政策学、国際農村発展論、比較農史学、農学原論)

4. 平成17年度（2005年度）の経過

ガイダンス等：改組に伴う学年進行により本年度も3回生以下の学生はいないので、ガイダンスは実施していない。なお、平成17年度末（平成18年3月31日）時点で、地域環境創造学コースでは2名がそのまま留年して在籍しており、生物資源経済学コースでは9名の学生のうち、3名が退学し、3名が卒業したので、残り3名が在籍している。これらの在籍学生は、何れも入学後8年目に当たるが、一部の学生は休学を経験しているので、どちらのコースも次年度も存続することになる。